



場所名詞に後接する「ニハ」と「デハ」

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-03-22 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 山木, 真理子 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24729/00002705

場所名詞に後接する「ニハ」と「デハ」

山 木 眞理子

1. はじめに

日本語の格助詞の「ニ」と「デ」には、それぞれ複数の用法がある。中でも場所を表す用法は、学習者にとって使い分けが難しく、日本語習得上の困難点となっている（迫田 2001, 蓮池 2004, 山木 2008 など）。

中国語を母語とする日本語学習者（以下、中国語母語話者という）の書いた作文¹には、これらの格助詞が場所を表す名詞（以下、場所名詞という）に後接し、さらに「ハ」を伴っている場合に、「ニハ」とすべきところで「デハ」を使ってしまった（1）のような誤用や、「デハ」とすべきところで「ニハ」を使ってしまった（2）のような誤用がよく見られる。

- (1) *私は今学校の寮に住んでいます。寮の部屋はちょっと狭いですがきれいですよ。部屋の中では（→ニハ）²いろいろな物があります。 （学部1年生後期）
- (2) *台湾には（→デハ）、野良犬は大変な問題だと思う。道にはよく野良犬の姿が見えている。 （学部4年生後期）

これらはいずれも「ニハ」か「デハ」のどちらか一方しか使えないケースであるが、そのほかに、「ニハ」でも「デハ」でも描写できる（3）のようなケースも存在している。

¹ LARP at SCUコーパス第2版（2011）

² 例文中のA（→B）は、Bが正用であることを表す。

- (3) 市民図書館 [には／では], 推薦図書のコーナーが設けられている。 (作例)

この場合, 「ニハ」を使っても「デハ」を使っても, 市民図書館に推薦図書のコーナーがあるという文の主旨に変わりはないが, どちらを恣意的に使っても構わないというわけではない。では, この使い分けのルールは, 何によって決まるのだろうか。

構造的に見ると, 「ニハ」は場所を表す格助詞の「ニ」に「ハ」が接続したものであり, 「デハ」は場所を表す格助詞の「デ」に「ハ」が接続したものである。この場所を表す「ニ」と「デ」については, 習得研究の分野で, 中国語母語話者に混同による誤用が見られることがたびたび報告されているが(迫田2001, 蓮池2004, 山木2008, 掲載予定), 「ニ」と「デ」の混同による誤用が誘発される要因の一因として, 統語的には「ニハ」も「デハ」も使用可能な(3)のようなケースの存在が, 学習者に混乱をもたらしていることも考えられる。

そこで, 本稿では日本語母語話者が書いた文を分析することを通じ, 「ニハ」だけが使える場合, 「デハ」だけが使える場合, 「ニハ」も「デハ」も使える場合の条件を明らかにするとともに, 「ニ」と「デ」に付加される「ハ」の使用の必要性についても検討し, 場所名詞に後接する「ニハ」と「デハ」の使い分けの整理を行う。

2. 先行研究

1. でも述べたように, 「ニハ」と「デハ」は, 構造的には格助詞の「ニ」, あるいは「デ」に, 助詞の「ハ」が接続したものである。この「ニハ」と「デハ」についてはすでに多くの研究がなされているが, そのほとんどは「ハ」の側からの論考であり, 「ニ」と「デ」のほうに比重を置いて考察されたものは少ない。

「ニ」と「デ」の観点から, 「ニハ」と「デハ」の使い分けが端的に整理されたものには, 益岡・田窪(1987)がある。益岡・田窪(1987, p.53)では, この「ニハ」と「デハ」について, 次のように

記述されている。

状況が成立する場所は、デ（ハ）で表す。

〔場所〕デ（ハ）＋〔状況〕

（４）³日本では、握手はあまり一般的ではありません。

これに対し、ニ（ハ）は、物の位置を表し、常に存在の表現が続く。

（５）日本には、握手の習慣はありません。

これは言い換えると、場所名詞が「デハ」で提示された（４）では、「日本」という国〔場所〕においては、握手という行為はあまり行われないという〔状況〕説明がなされているのに対し、（５）では、単に「日本」という国〔場所〕における握手の習慣の有無が述べられているということである。

だが、ここで（５）の文に、「アメリカ〔で／に／φ〕は握手の習慣があるのだが」という明示的、あるいは暗示的な文脈を与えてみよう。するとたちまち、（５′）に示したように、「ニハ」だけでなく、同時に「デハ」も使えるようになる。

（５′）日本では、握手の習慣はありません。

この「ニハ」と「デハ」の両方が使用可能になるという現象は、先の（３）と共通するものだが、その使い分けの基準は、学習者にとっては分かりにくいものだと考えられる。

一方、「ハ」の方向から「ニハ」と「デハ」を考察した先行研究には、青木（1992）、野田（1996）、村田（1997）がある。これらの研究では、「ハ」の統語的特徴や文中での機能、「主題」⁴か「対比」かとい

³ 例文の番号は、全て本稿での通し番号に変更した。

⁴ 青木（1992）では「題目提示用法」、村田（1997）では「項目提示」と称されているが、本稿では日本語教育の場で使用されている野田（1996）、日本語記述文法研究会（2009b）の用語を使用することにする。

う意味役割などを中心に考察されている。中でも村田（1997）は、多くの実際の文例を用いて、「ハ」に前接する「ニ」と「デ」についても考察を行っている。考察に当たっては名詞の性格や動詞の性格も踏まえて記述されてはいるものの、「ハ」を中心とした論考であるため、場所用法の全ての「ニハ」と「デハ」について明らかにされているわけではない。

場所を表す「ニ」や「デ」の機能については、青木（1992）、野田（1996）、村田（1997）では、もともと「主題」になりやすい助詞であるため「場所名詞 [ニ/デ] +ハ」の場合は一般的に「主題」を表すとの指摘がなされている。これを「対比」と判断するためには、文脈に明示的、あるいは暗示的な対比の相手が想定できることが必要であるという。また、「場所名詞 ニ」や「場所名詞 デ」と「ハ」との意味関係については、村田（1997）で、「ハ」がなければ話し手が伝えたい意図は変わるが文の主旨は変わらず、「ハ」の付加に義務性はないと述べられている。この「意図」と「主旨」ということばは村田（1997）の用語であり、村田（1997）では、話し手が聞き手に伝えたい情報を「意図」、文や話の内容の中心を「主旨」とするとされている。そこで、本稿でもこの村田の用語を使用し、議論を進めていくことにする。

この「主旨」と「意図」に関して、日本語教育の観点から考えたとき、初級の学習者の場合には多くのことを求められないが、中級以上の学習者の場合は、自らの意図を過不足なくことばに表現できるということも、大切に考えていかなければならないことであろう。

従来の場所を表す格助詞の「ニ」と「デ」の習得研究では、誤用研究や、どちらの助詞を使うのが正しいのかといった研究に傾く傾向があり、どちらも使える場合についての話し手の意図を重視した使い分けの検討はほとんどされて来なかった。また、「ニ」や「デ」に「ハ」が接続した「ニハ」と「デハ」に関しても、「ハ」の付加によって表現されることになる話し手の意図や、構文に及ぼす影響について、「ニ」や「デ」の方面から用法ごとに十分考察されているとは言い難

い。そこで本稿では、日本語母語話者の書き言葉の分析を通して「ニハ」と「デハ」の使用のルールについて検討を試みる。

3. 分析資料と考察の方法

本稿では、場所を表す「ニハ」と「デハ」が、文中でそれぞれ実際に使われた用例を観察することにより、「ニハ」、あるいは「デハ」だけが使える場合と、「ニハ」と「デハ」の両方が使える場合について、助詞の用法とその直前に置かれた場所名詞や文の述語の性格の観点から考察を行う。考察に当たっては、「ハ」の必要性の有無を検討し、「ニハ」と「デハ」の両方が使える場合には話し手の意図がどのように変化するかという点についても、合わせて考察を行うこととする。なお、文中における「ニハ」や「デハ」の位置関係については、文頭に置かれる場合がある一方で、前に接続詞や陳述の副詞、長い修飾語等がついているものなどさまざまである。これについては、青木(1992)、野田(1996)で、主題は常に文頭に置かれるわけではないとの指摘がなされていることから、本稿ではこの文中での位置については考慮しないこととする。

ところで、前述したように、本稿で考察の対象とする「ニハ」と「デハ」は、空間場所を表す「ニ」や「デ」に、主題や対比を表す「ハ」が付加されたものである。そこで、日本語記述文法研究会(2009a)の分類を用い、ここで「ニ」格と「デ」格の場所に関する用法を次のように確認しておきたい。

(6) 「ニ」の用法

- a. 机の上に本がある。(場所：存在の場所)
- b. あごに髭が生える。(場所：出現の場所)
- c. 子どもが学校に行く。(着点：移動の着点)
- d. 集合場所が駅に決まる。(着点：変化の結果)

(7) 「デ」の用法

- e. 庭で犬が吠えている。(場所：動きの場所)
- f. 富士山が日本でもっとも高い山だ。(領域：一定の領域において成立する事態・状況)

なお、分析資料には、主に国立国語研究所の現代日本語書き言葉均衡コーパス『中納言』(BCCWJ)から採集したものを使用した⁵。

以下4. では、「ニハ」が使用された文と「デハ」が使用された文を「ニ」と「デ」の用法別に考察していく。

4. 用例に見る「ニハ」と「デハ」の使い分けのルール

4.1 「ニハ」だけが使える場合

(6)に示したように、「ニ」の場所を表す用法には、「場所(存在の場所・出現の場所)」と「着点(移動の着点・変化の結果)」がある。ここでは、統語的に「デハ」に置き換えられない「ニハ」の使用例を用法別に見ていき、「ハ」の果たしている役割についても同時に考える。

4.1.1 場所

「場所」というのは「存在の場所」と「出現の場所」を表す用法を合わせた総称であり、このうち「ニ」の典型的な場所用法は「存在の場所」である。

次の用例(8)~(11)の「ニ」の前に置かれた場所を表す名詞には、具象的な場所だけでなく抽象的な空間場所を表す名詞も使われ、述語には「ある(ない)」「いる(いない)」「存在する」等の状態を表す動詞が使われている。存在状態を述べる場合には、いずれも「デハ」で提示することはできず、「ニハ」しか使えない。

⁵ 先行研究や新聞等の用例を使用した際には、用例の後に出典を記した。

- (8) シャーゼーマン王の邸には、兄王の庭を見渡せる格子窓があった。
- (9) 「兄さんが保証人になるという条件でなら、契約してもええんですわ」その口調には、恩着せがましい響きがあった。
- (10) シェリルのお腹には、二番目の子供もいる。
- (11) アメリカには大統領が存在しますが、これは私どもが選出した仲間の一人に過ぎません。

先行研究では、このような「ニ」に後続する「ハ」は明示的、あるいは暗示的な対比の文脈の支えがない限りは「主題」を表すとされ、村田(1997)では「ハ」を省略しても文の主旨そのものは変化しないと述べられている。しかし、日本語教育の観点から見た場合、伝える内容が変わらないという理由だけで「ハ」の付加を任意とするには問題がある。「ハ」が省略されてしまうと単なる存在文になってしまい、伝えたいことが十分に伝えられなくなることで、話し手の表現意図からずれてしまう恐れがあるからである。(8)~(11)の「ニハ」の「ハ」は、場所名詞が表す具象的、あるいは抽象的な場所を、話し手が聞き手に話題の主題として取り上げていることを明示する働きがある。

また、(12)~(15)のように、文中に補助動詞の「ている」、「である」が使われている場合にも、動詞の性格に関わらず述語は状態性となるため、やはり「デハ」に置き換えることはできない。「ハ」の使用の必要性について言えば、話し手が「ニハ」に前接する場所名詞をこれから導入する話題の主題にして話を切り出そうと考えている場合には省略することはできない。

- (12) つぼには、「オレンジマーマレード」と書いた紙のレットルがはってありましたが、中がからっぽだったので、アリスはひどくがっかりしました。

- (13) 通りの向こうでコッカースパニエルと遊ぶ少年を見ながら、彼女は耕太を思う。彼といる時、なぜかいつも心の底には帰りを待つ母の姿が坐っていた。
- (14) ケースの中には、アンプルに入った天然痘ウイルス株が収められている。
- (15) ドアを開けるなり、まだ、童顔の中学生ぐらいの少年が飛び込んできて、ぺこりと頭をさげた。(…略…) 手にはグローブを持っていた。

2つの場所が対比され、量の多寡を表す「多い」「少ない」などの形容詞述語が使われている次のような文の場合にも、「デハ」への置き換えは難しい。

- (16) 進行方向に向かって、右側は山地で、左側にはなだらかなところが多い。
- (16a) ? 進行方向に向かって、右側は山地で、左側ではなだらかなところが多い。
- (17) 茶葉の中のビタミンCは、緑茶には多量に存在するが、煎じ汁の中には少ないという報告が藤田の研究や中川の研究でわかっている。
- (17a) ? 茶葉の中のビタミンCは、緑茶には多量に存在するが、煎じ汁の中では少ないという報告が藤田の研究や中川の研究でわかっている。

(16) (17) の「ニハ」が「デハ」に置き換えにくい理由としては、構文的な要因が考えられる。(16) は、前文が「右側は山地だ」という所在型構文⁶であり、(17) は「存在する」という動詞が使われた存在文である。後半だけを(16a) (17a) のように「デハ」に換えると、

⁶ 日本語記述文法研究会 (2009 a)

一文中の前半は存在文，後半は領域を表す文となって均衡が崩れ，不自然になってしまう。

「ハ」の使用の必要性について考えると，(16)では「右側」に対して「左側」，(17)では「緑茶」に対して「煎じ汁」がそれぞれ挙げられており，対比の構造になっている。このような場合，片方から「ハ」を取ってしまうと(16b)や(17b)のように並列の関係が崩れ，文意が分かりにくくなってしまう。そのため，このような対比の「ハ」は省略できない。

(16b) *進行方向に向かって，右側は山地で，左側になだらかなところが多い。

(17b) *茶葉の中のビタミンCは，緑茶には多量に存在するが，煎じ汁の中に少ないという報告が藤田の研究や中川の研究でわかっている。

また，認知物のありかを表す「見える」「見つける」などの場合にも「デハ」は使えず，その存在場所は「ニハ」によって提示される。

(18) 窓の外には，花壇が見える。(作例)

(19) 2には「このデバイスにはペアリングコードが設定されているのでマニュアルなどで確認せよ」と表示されています(しかしマニュアルやパッケージ，本体裏などには見つけられませんでした)。

<http://forum.unlimitedhand.com/forums/topic/trouble-with-installing-the-unlimitedhand-arduino-library/page/2/>
(2017.12.24)

(18)(19)の「ハ」も，明示的，あるいは暗示的な対比の文脈がなければ機能的には「主題」を表すが，省略は可能である。ただし，先にも述べたように，話し手が「ニハ」に前接する場所(「窓の外」，

「マニュアルやパッケージ、本体裏など」)を主題として導入しようという意図がある場合、「ハ」は省略できない。

次の(20)~(22)は、(6) b.で確認したような「ニ」の「出現」の場所を表す用法の例である。「出現」には、ある場所に何かが登場した後、そこに存在するようになるという意味が含意されているため、「デハ」への置き換えはできない。「ハ」は「主題」を表し、話し手が「ニ」の前の場所名詞を主題化する意図がなければ、「ハ」は省略可能であるが、2つの場所が対比されている(22)の場合には省略できない。

- (20) かわいそうなソーニアの告白を聞いて、ルパンの目には、深い同情と憐憫の念からうっすらと涙が浮かびます。
- (21) 額には朝ながら汗がにじんだ。
- (22) 長距離輸送機関のエースとして鉄道が誕生すると、当然のように、駅には食堂、列車には食堂車が誕生し、一流レストランに優るとも劣らない食事と給仕のサービスを提供した。

4.1.2 着点

「着点」の用法には、大きく分けて「移動の着点」と「変化の結果」がある。このうち、「移動の着点」は、さらに「到達点」と「接点」に分類される。次の(23)は主体の移動の到達点、(24)は対象の移動の到達点、(25)は主体の接点、(26)は対象の接点、(27)は主体の移動の接点である。この「着点」の用法では「ニハ」しか使えず、「デハ」に置き換えられない。「ハ」は「主題」を表わしており省略が可能だが、話し手の意図性という観点からは考慮が必要である。

- (23) お咲さんは、田舎から父親危篤の通知を受けとり、三番目の乳呑児をつれて帰郷した。そして再び千葉の寺には戻らなかった。

- (24) 新居には友だちが荷物を運んでくれた。
- (25) [彼は]⁷瘦せて、すらっと背が高く、額にはまだ巻き毛のかかる並抜けて二枚目の若者だった。
- (26) 庭にはクリスマスツリー、部屋の壁には送られてきたクリスマスカードが貼られ、ラジオからはクリスマスキャロルが聞こえてくるようになります。
- (27) 父も母もちろん、大反対でした。(…略…) たとえば、船の給料が陸上の十倍あっても船には乗るなど言うのです。

「着点」の用法の中で、もう一方の「変化の結果」はやや特殊である。「変化の結果」というのは、(28)のような自動詞を用いて主体の変化後の状態を表す文のことである。(28a)のように主題の「ハ」を付加することは可能だが、単に「ニ」を「ニハ」に変えるだけでは座りが悪い。そこで、(28b)に示したように、後ろに述語をタ形にした逆接の文を加えると違和感がなくなる。(29)と(29')も同様の例である。理由は、「ハ」が対比を表すため、対比されるものが文脈に暗示的にでもあればよいが、ない場合には明示する必要があるからであろう。

- (28) 集合場所が駅に決まる。(日本語記述文法研究会 2009)
- (28a) ? 集合場所が駅には決まる。
- (28b) 集合場所が駅には決まったが、駅のどこかはまだ決まっていない。
- (29) 北九州市民球場で行われる予定だった開会式は、雨のためメディアドームに変更された。『西日本新聞』2016年07月10日
http://www.nishinippon.co.jp/nsp/koushien_fukuoka_2016/

⁷ [] 内は筆者による補足説明。

article/257868

(29') 北九州市民球場で行われる予定だった開会式は、雨のためメディアドームには変更されたが、開幕戦は翌日に順延となった。

4.2 「デハ」だけが使える場合

ここでは、統語的に「ニハ」に置き換えられない「デハ」の使用例を用法別に見ていき、「ハ」の果たす役割とその必要性についても同時に考察する。基盤となる「デ」の場所用法は、「場所（動きの場所）」と「領域（一定の領域において成立する事態・状況）」の2種類である。

4.2.1 場所

「デ」の「動きの場所」は、さらに「動作・出来事の成立する位置を表す用法」と、「出来事の発生を表す用法」に分類される。次の用例に示すように、いずれの用法でも「デ」の後ろに「ハ」が付加できる。

- (30) 山では鶯が鳴いている。(作例)
- (31) セミの体の上では幼虫はあまり活発な運動はしない。
- (32) 先日の最高裁前での抗議集会では、軍と警察が棍棒を大いにふりまわして暴れた。
- (33) あした会社では、来年の秋冬商品の企画会議がある。(作例)

(30)～(32)は「動作・出来事の成立する位置を表す用法」の用例であり、(33)は出来事を表す名詞を主体とした「出来事の発生を表す用法」の例である。このような「デハ」は「ニハ」に置き換えることはできない。これらの場合、「ハ」は「主題」を表しており、上述したように、たとえ省略したとしても非文にはならないが、話し手の意図とずれが生じることにより、単なる動作の背景場所としてしか表現できなくなってしまう恐れがある。

ただし、(34)の「中国」と「日本」のように、2つの場所が比較して述べられている場合には、どちらの場所名詞の後ろにも「対比」の「ハ」が必要である。

- (34) 中国では五台山巡礼が早くからおこなわれており、日本では平安時代はじめ清和天皇をはじめ、天皇・貴族らが巡礼をしている。
- (34') *中国では五台山巡礼が早くからおこなわれており、日本で平安時代はじめ清和天皇をはじめ、天皇・貴族らが巡礼をしている。

4.2.2 領域

「領域」という用法名は、日本語記述文法研究会(2009a)の用語であるため、少々説明を加えておきたい。日本語記述文法研究会(2009a, p.93)によると、「領域」とは「ある事態が成立する際に前提となる範囲」のことである。この中には、(7) f.で示したような「場所 デ [一番／もつとも] ~」のような評価の成り立つ場所や、一定の領域において成り立つ事態や状況(例(35), (36)), 一定の範囲を持つと見なされる組織や集団、部類(例(37), (38))が含まれる。

- (35) 日本では緑茶がよく飲まれている。(日本語記述文法研究会 2009)
- (36) マスコミでは攻撃的な発言をする人物がもてはやされる。(日本語記述文法研究会 2009)
- (37) それなら生殖細胞はどこにあるのでしょうか? 若い胚では生殖細胞はないのでしょうか?
- (38) マウスであれば, [受精卵を] 培養して [キメラマウスを] 発生させることができるが, ヒツジではそうはいかない。

「領域」という用法では、何らかの限定された範囲が「デ」によっ

て提示される。その典型は、(7) f.の「場所 デ [一番／もっとも] ～」という評価の成り立つ場所であろう。(7) f.の場合は、「デ」の後ろに「ハ」を伴って「富士山が日本ではもっとも高い山だ。」とすることができる一方で、「ハ」が付加できない場合もある。それは、「デ」で提示される場所名詞に最大の空間場所を表す「世界」や「この世」などが使われ、述語が「一番」や「最も」で修飾されている場合である。このときには、ほかに比べ得る空間場所がないため、「対比」の「ハ」は使用できない。

(39) *世界では⁸いちばん君が好きです。(日本語記述文法研究会2009)

(40) *自分の子がこの世ではもっともかわいいものだ。(日本語記述文法研究会2009)

4.3 「ニハ」も「デハ」も使える場合

4.1では、「デハ」に置き換えることができない「場所」と「着点」の「ニハ」を、4.2では「ニハ」に置き換えることができない「場所」と「領域」の「デハ」を見た。だが、この「ニハ」と「デハ」には、実際には(41)～(45)のように、統語的にどちらも使えるケースも存在している。では、どのような場合にどちらも使えるのだろうか。また、「ニハ」を使った場合と「デハ」を使った場合とでは、話し手の意図はどのように異なるのだろうか。用例を観察した結果、この話し手の意図の違いは、格助詞に前接する名詞の性格、および述語との組み合わせによって、次の3つに分類できそうなことが分かった。

①存在の場所か、領域か

このケースでは、助詞に前接された場所名詞に何らかのカテゴリー性(種類)や地域性が見られ、述語に「ある(ない)」、「いる(いな

⁸ 波線部は筆者による加筆。

い)」、量の多寡を表す形容詞、補助動詞の「ている」「である」が使われていることが特徴として挙げられる。「ニハ」が使われた場合には、話し手は事物の存在する場所に重点を置いて話したいと考えており、「デハ」が用いられれば、限定された場所やある種のカテゴリー、つまり「領域」に重点を置いて伝えたいと考えているのである。

- (41) 匈奴と漢民族が激しくぶつかったこの地 [には／では]、たたかひの歴史を物語る遺跡も多い。
- (42) 二十一世紀は民族大移動の世紀となるだろう。もうすでにヨーロッパ [には／では]、アフリカやトルコ、旧ソビエト連邦から大量の人々が移住しているし、(後略)
- (43) シロアリ科 [には／では]、共生する原生動物はいないが、腸内のバクテリアが共生者として働く。
- (44) 結婚は本人同士が決めるもの！とは思っていますが、上流家庭 [には／では] 私たちには理解できないものが多々あるのでしょうか。
- (45) この時期に登用された代官の中 [には／では]、治水工事や河川の改修に手腕を発揮した者が多かったが、(後略)

次の(46)のように、「聞こえる」などの認知動詞が使われた場合も同様である。「ニハ」を使った場合には、男の声がした場所(つまり、声が存在した場所)に重きを置いた表現となるが、今自分が実際に身を置いている空間と、そこから離れた場所にある「勝手口」という別の空間を意識した場合には、「領域」の「デハ」の使用も可能となる。

- (46) [下駄を] 自分で揃へた時には、もうかれこれ十一時近くで、勝手口 [には／では] 昨夜の皿小鉢を取りに来る仕出屋の男の声が聞えた。

②発生の場所か，領域か

文中に発生の意味を持つ動詞が使われた場合，「ニハ」は，話し手が発生の場所に重きを置いて話す場合に使われる。事態や状況が成り立つ一定の領域について話したい場合には「デハ」が用いられる。

- (47) 心理的述語として用いられたstrike, remindは，非状態的 (nonstative) 動詞が生じる構文 [には／では] 生じることができない。
- (48) 湯布院 [には／では] よく霧が発生する。(作例)
- (49) 近年日本 [には／では] 地震がよく起きる。(作例)

③着点か，動作の場所か

「集まる」のような着点を要求し，同時に動作性も帯びている動詞が使われた場合，話し手が移動を伴う動作の結果留まることになった場所を表現したい場合には，「ニハ」が使われる。一方，「集まる」という動作そのものを伝えたい場合には，「デハ」のほうが使われる。このような動詞のタイプには，他に (51) で用例を示した「座る」などがある。

- (50) 午後の討論会 [には／では]，女性たち四〇〇人が集まって，証言に耳を傾けた。
- (51) 木の下 [には／では] 子供たちが座った。(作例)

①～③のようなケースでは，「ニハ」も「デハ」も使えるが，「ニハ」は存在の「場所」や「着点」，「デハ」は動作の「場所」や「領域」と，その表す場所はそれぞれ異なる。話し手はこの点を踏まえて，自分の意図に合うように「ニハ」と「デハ」を適切に使い分ける必要がある。

5. まとめと今後の課題

本稿では、中国語母語話者が混同による誤用を起ししやすい場所を表す「ニハ」と「デハ」の使い分けのルールについて、話し手の意図を考慮しつつ、格助詞「ニ」と「デ」の方面から考察を試みた。その結果、明らかになったことを表1～表3にまとめる。

表1. 「ニハ」だけが使える場合

二格の用法	使用される述語や場所名詞	ハの付加	話者の意図	注意点
場所	・述語は状態性の述語 例)ある(ない)、いる(いない)、存在する、多い、少ない、～ている、～である、見える、見つかる等	○	主題の明示 ※文脈の支えがあれば、対比	・「ハ」が「主題」の場合、話し手の意図により省略可能 ・2つの場所が対比されている場合には、「ハ」は省略できない
着点	述語は、着点を要求する動詞 例)戻る、貼る、決まる、変更する	△	主題の明示 ※文脈の支えがあれば、対比	・「ハ」が「主題」の場合、話し手の意図により省略可能 ・「変化の結果」では、動詞をタ形にし、さらに連接の文を加えなければ文が成立しない

表2. 「デハ」だけが使える場合

二格の用法	使用される述語や場所名詞	ハの付加	話者の意図	注意点
場所	述語には動作性の動詞が使われるが、出来事の発生を表す場合は状態動詞の「ある(ない)」「いる(いない)」が使われる	○	主題の明示 ※文脈の支えがあれば、対比	・「ハ」が「主題」の場合、話し手の意図により省略可能 ・2つの場所が対比されている場合には、「ハ」は省略できない
領域	・空間性やカテゴリー性をもった場所名詞が使われる。 ・述語は状態性の述語 例)ある(ない)、いる(いない)、存在する、多い、少ない、～ている、～である等	△	主題の明示 ※文脈の支えがあれば、対比	・「[世界/この世]で[一番/最も]～」の文型には、「ハ」は付加できない。

表3. 「ニハ」も「デハ」も使える場合

ケース	述語の特徴	ハの付加	話者の意図	使い分けの基準
①存在の場所か、領域か	述語は状態性の述語。 例)ある(ない)、いる(いない)、存在する、多い、少ない、～ている、～である、聞こえる等	○	主題の明示 ※文脈の支えがあれば、対比	存在物の「場所」として伝えたい場合は「ニハ」、「領域」を伝えたい場合は「デハ」
②発生の場所か、領域か	述語に発生を表す動詞が使われた場合 例)生じる、発生する、起きる等	△	主題の明示 ※文脈の支えがあれば、対比	発生の「場所」を伝えたい場合は「ニハ」、事態や状況が成り立つ一定の「領域」について伝えたい場合は「デハ」
③着点か、動作の場所か	述語に着点を要求する動詞で、同時に動作性も帯びている動詞が使われた場合 例)集まる、座る等	○	主題の明示 ※文脈の支えがあれば、対比	移動を伴う動作の結果留まることになった場所として表現したい場合は「ニハ」、動作の「場所」として伝えたい場合には「デハ」

場所を表す格助詞の「ニ」と「デ」の意味機能については、これまでも日本語教育の場で教えられて来てはいたが、どちらを使ってもよい場合や、さらに「ハ」が下接した場合については、あまり教えられて来なかったのではないだろうか。そのため、本稿で取り上げた「ニハ」と「デハ」は、日本語学習者には一見恣意的な使われ方をしているように見え、「ハ」の使い方も含めてその違いが理解しにくいものであったことが考えられる。

今回はあまり扱えなかったが、この「ニハ」と「デハ」には、一文中に複数回出現するものもある。今後はそれらも合わせて考察し、「ニハ」と「デハ」のより体系的な整理を行いたい。

参考文献

- 青木伶子 (1992) 『現代語助詞「は」の構文論的研究』, 笠間書院.
- 神尾昭雄 (1980) 「「に」と「で」—日本語における空間的位置の表現」, 『月刊言語』 Vol. 9, pp.55-63.
- 迫田久美子 (2001) 「学習者の誤用を産み出す言語処理のストラテジー (1) 一場所を表す「に」と「で」の場合」 『広島大学日本語教育研究』 (11), pp.17-22, 広島大学.
- 日本語記述文法研究会 (2009a) 『現代日本語文法2』, くろしお出版.
- 日本語記述文法研究会 (2009b) 『現代日本語文法5』, くろしお出版.
- 野田尚史 (1996) 『「は」と「が」』, くろしお出版.
- 蓮池いずみ (2004) 「場所を示す格助詞「に」の過剰使用に関する一考察 —中級レベルの中国語母語話者の助詞選択ストラテジー分析—」 『日本語教育』 (122), pp.52-61, 日本語教育学会.
- 益岡隆志・田窪行則 (1987) 『セルフマスターシリーズ3 格助詞』, くろしお出版.
- 益岡隆志・田窪行則 (1992) 『基礎日本語文法 一改訂版—』, くろしお出版.
- 松村明 (1971) 『日本文法大辞典』, 明治書院.
- 村田美穂子 (1997) 『助辞「は」のすべて』, 至文堂.

山木眞理子（2008）「中国人日本語学習者の母語を生かした格助詞指導の可能性 —場所を表す日本語の格助詞「ニ」「デ」と中国語の介詞“在”—」, 『日本語文化研究』第3輯, 大連理工大学出版社（中国）

山木眞理子（掲載予定）「中国語話者における格助詞「ニ」と「デ」の使用実態 —LARP at SCUコーパスを資料として—」, 『日語研究』第10輯, 商務印書館（中国）.

（大阪府立大学大学院人間社会学研究科 博士後期課程）